

経済人類学は難解か？

——ポランニー『経済と文明』の翻訳をめぐる——

民族学振興会研究員・専修大学非常勤講師

渡部重行

1. はじめに

まず最初に、本稿を書くに至った経緯を簡単に説明しておくことにしたい。筆者は昨年春から、宇都榮子、澤野 徹、樋口 淳、福島義和、室井義雄（五十音順・敬称略）等、専修大学社会科学研究所員を中心として行われてきた読書会に参加する機会を得、昨年の秋から、K. ポランニーの『経済と文明』（サイマル出版会：栗本慎一郎、端 信行訳。1975年初版・1981年新版）を読むことになった。本書については、以前からじっくり読み直してみたいと思っていたことでもあり、ちょうど良い機会なので、原書と付き合わせながら取り組んでみることにしたのである。ところがそうして読んでみると、訳文に問題があるのではないかと思わされる個所が、少なからず存在するのである。

この経済人類学の古典ともいうべき著作にいちはやく着目し、日本に紹介した訳者たちの功績は、きわめて大きい。その点はどれほど強調しても、しすぎることはないであろう。だが、その努力の成果が、翻訳上の不注意や訳文の曖昧さのために、十分に理解されていないとすれば、それは訳者たち自身にとっても不本意な状態ではないだろうか。本稿の目的はそうした事態を改善するためにいささかなりとも寄与できればという、その一点に尽きる。

この訳書については、すでに別宮定徳氏が批評を行い（同氏『続／誤訳 迷訳 欠陥翻訳』文芸春秋社。1983）、かなり厳しい評価を下している。しかし彼の批判は、もっぱら英語の読解力と日本語の表現力に限定されたものであり、論評の範囲も初めの導入部にとどまる。筆者は文化人類学を専門とし、『経済と文明』で論じられているダホメ王国の東に境を接するヨルバ族の調査を行って、当該地域についてもある程度の知識を得ている。本稿ではこうした立場を生かして、第1部と第2部のダホメの社会・文化に関する記述に焦点を絞り、上記訳書の問題点を検討してみたいと考えた次第である。したがって本稿では、単に翻訳上の問題を論じるにとどまらず、内容にも一歩踏み込んで考えてみることにしたい。

具体的な論の進め方については、まず最初に『経済と文明』の一般的な理解の上で問題になると思われる点を取り上げ、次に人類学的な知識に関わる問題を、そして最後にアフリカ

およびダホメに関する知識について、という順序で行うことにしたい。なお引用文の末尾の数字は、日本語は訳書、英文は原書〔K.Polanyi “Dahomey and the Slave Trade” Univ. of Washington Press, Seattle: 1966〕の頁を示す。また、筆者の訳はあくまでも参考にするためのものであって、それが決定訳だと主張するつもりはまったくない。

2. 一般的な理解に関わる問題点

『経済と文明』については、以前からわかりにくい訳だという評価があったらしく、訳者たちも新版の前書きで「訳文が読みにくいとの批判」(1)に言及し、「かなりの改訂を行った」(同頁)と述べている。しかしながら、それでもまだわかりにくい部分や問題のある箇所が、少なからず残っているように思われる。

まずは、問題があると思われる訳の例を2つほどあげてみよう。

「もちろん、国家的な敵対者はオヨであった。これは1708年には、確固とした事実となっていた。その時から23年にわたる努力ののちダホメ王国はウェメヌ族を壊滅することに成功した。」(43)〔下線 引用者：以下も同様〕

この文は、第1部第2章中で、ダホメとその北東にある強大な帝国オヨとの関係を論じた部分の冒頭であり、緩衝地帯としてのウェメヌが消滅したために、ダホメとオヨが直接対峙するようになったことを述べている。

一読したかぎりでは、この訳文には問題がないように見える。ところが、下線を引いた部分の時間関係はまったく逆なのである。原文は「～1708年に明白な事実となった。それまでの23年の努力ののちに、ダホメが～」〔註1〕となっており、上記の訳では1731年にウェメヌが滅んだことになるが、原文では1708年となる。訳文では、両国が直接対峙する原因になった事件が、その結果よりも後に起こるということになるのである。これなどはごく些細なケアレス・ミスであろうが、その結果は事実関係の誤認となってあらわれるのであり、訳者の不注意が悔やまれるところである。

次は第2部第1章に移って、人身供犠に関する記述があり、ダホメではそれがいかに重要であったかということが述べられる。その中の一節に次のような文章がある。

「奴隷販売で余分の利益が期待されない場合は、王が必要数から犠牲一人を予備にとっておくことになる。」(56)〔註2〕

この訳の原文は私訳によれば、「たとえ奴隷交易からどれほど利益が期待されようと、王が供犠に必要とさる人数をたった一人でもそちらにまわして、利益を得ようとすることはなかった」という意味になるはずであり、人身供犠の重要性を強調するものと考えられるのであ

るが、上記の文章ではそれが十分に伝わらず、読者はむしろ逆に理解してしまうのではないだろうか。

このように原文と逆の意味に取られかねない個所は、日本語としてある程度意味が通れば、原書と比較対照するのではないかぎり、それが間違っているということはわからず、読者はそのまま鵜のみにするしかない。訳者の責任は思いと言えよう。

他方では、日本語としてわかりにくいという訳文もある。次の例は、第2部第1章の双分性を説明した部分の一節で、ダホメの政治組織の効率の良さを論じた後に続く文章である。ダホメの政治組織においては、女性の果たす役割がきわめて大きいということを念頭に置いて、読んでいただきたい。

「ある社会学的要素すなわち女性的特徴が働いていた可能性は無視できない。われわれは、そこに機能していたはずの物質的要素と文化的要素との連関比重を考えてみようとはしなかった。これについては、女性たちは国体機能に決定的な分野では、それほど大きな役割を、国家的レベルでの共同体では果たさなかったのは事実である。細事をよくし、常識の根ざす日常的事実の情報を記憶することにかけての女性の天賦は、ためされ、そして欠点がないことが認められた。」(79)

この文章がわかりにくいと考えるのは筆者だけであろうか。試みに、筆者なりの訳文をつくってみると、次のようになる。

「〔こうした効率的な組織の存在について〕ある社会学的な要因、いわゆる女性的特徴といった要素が大きく関与しているのではないか、という可能性は確かに無視しえない。〔しかし〕我々は、そこに働いていたかもしれない要因が、どの程度〔人類に共通の〕生理的要素に基づき、どの程度文化的要素に基づくのか、といった議論には立ち入らないことにする。〔我々の前にある〕事実、国家的なレベルでそれに必須の機能を、これほど多く女性の力に負っている例は、〔ダホメ以外には〕ほとんど存在しないということである。〔そしてまた、このダホメにおいて〕女性の細事をよくする能力や、さまざまな判断のもとになる日常生活に関する情報を記憶する天賦の才が試され、十分に有効であることが立証された。〔我々はこうした事実を確認するだけにとどめよう〕」〔註3〕(文中の〔～〕は引用者による補足である。以下も同様。)

拙訳によれば、ポランニーは、ダホメの事例から女性一般を論じることを、賢明にも自制していたということになり、この一節は彼の学者としての姿勢を知る上で、なかなか興味深いものと言えるのであるが、訳書の表現でそれがわかるであろうか。

翻訳を行なう時、訳者はもちろんどのような形で日本語にするかを考えてから取りかかる

であろう。そしてその際に学術的な著作では、しばしば原文への忠実さが最優先されるようである。しかし、一般の読者も対象にしたと見られる本書のような場合には、曖昧な部分については専門家である訳者が解釈し、原文にない文章もあえておぎなうような形で、わかりやすく訳するという態度が望ましいと考えるのだが、それは間違っているであろうか。

少なくとも本書の場合は、そうした配慮が欠けているとは言わないまでも、不足しているという感がいなめない。たとえば、第2部全体のまとめともいべき次の文章である。少々長くなるが引用してみよう。

「統計的資資〔ママ〕がないので、私たちが社会的福祉の指標なのかその反対なのかを経済史家の慣行に基づいて、成功か失敗かをはからざるをえない。社会的均衡すなわち生活の安定的標準があるのか、あるいは飢餓、人口減少、民衆騒擾があるのかが、その指標である。

貨幣化されてはいなかったがダホメの莫大な外国貿易は、交易のありかたに非常にきびしい試練をあたえた。だが、市場システムに代表される均衡メカニズムを欠きながらも、1世紀をこえる戦争と平和の時代に、いかにして安定した交換が維持されたのだろうか。私たちの分析のこの段階では、古代的経済の構造的均衡性こそが、需給による価格均衡にかわる工夫だったように思われる。」(126)〔註4〕

まず訳文の前半は下線を引いた部分がわかりにくく、何が社会的福祉の指標なのか、何が成功または失敗なのか、その両者がどのような関係にあるのか、といった点が曖昧になっている。これを原文にそって、できるだけやさしい言葉で訳してみれば、「統計的資料を欠いているために、我々は経済史家が一般に用いている基準、すなわち社会が良好な状態にあるか否かによって、〔ダホメの経済システムが〕うまく機能しているかどうかを判断するしかない。それには、～が指標になる。」となるであろう。拙訳は厳密ではないかもしれないが、その分かりやすくなっていると思うのだが、どうであろうか。

また、後半部分は一読したかぎりでは問題がないように見える。しかし下線部分の「外国貿易」と「交易」は別のものなのだろうか。このふたつの語は、少なくとも本書の中では同じ意味合いで用いられてきた。もしこの両者が同じだったとすれば、あるものがそれ自体に試練を与えるというこの文章は、意味をなさないことになる。ちなみに原文では外国貿易が'foreign trade'、交易が'exchanges'となっており、後者を交易と訳するのは少々無理がある。この'exchanges'という語は、1行後にある「安定した交換」の「交換」と同じ語であり〔註4参照〕、普通に考えれば同じものを指すと見てよい。それになぜ別の訳語を与えたのか。そうしたことを考えながら、もう一度上の訳文を読みなおすと、その意味はけっして判明とは

言えなくなるのである。

そもそもこの引用文は、註の4で示したように原書ではひとつの段落に納められている。それが訳文ではふたつの段落に分かれたれ、前段と後段の間に直接的な関連はないかのように見える。ところが原文ではこのふたつの間にもうひとつ文章があり、それで両者がつながっているのである。その文章を含めて後半部を訳せば、次のようになる。

「〔経済がうまく機能しているかどうかを知る指標は上記のとおりであるが〕経済が貨幣化されている場合には、通貨の安定性というものが、きわめて重要な指標〔原文では比喩的に「地震計」と言っている〕となる。——以上が省略されていた部分である——ダホメの場合、部分的にしか貨幣化されていないとはいえ〔上の訳文ではまったく貨幣化されていないことになっている〕、海外貿易が〔国内の〕交換に与えた影響は甚大であった。それにもかかわらず、しかも市場システムに代表される均衡のメカニズムを欠いていながら、戦乱の時期を含む一世紀以上の長きにわたって、安定した交換〔すなわち市場における価格の安定〕が維持されたのは、いったい何によるのであろうか。〜」

このように訳せば、段落全体のつながりもいくらかは明らかになると考えるが、いかがなものであろうか。

上にあげてきたような文章は特異な例ではなく、本訳書の随所に見られるのである。これでは専門外の者が読んで難解と感しても無理はないであろう。先にも述べたように、原書の文意を出来る限り忠実に再現するということは、もちろん大切である。しかし、そのことによって、日本語の読者の理解が困難になるとすれば、本末転倒のそしりを免れないのではないだろうか。理想的な翻訳が、原文の忠実な再現と日本語としてのわかりやすさという、二つの要請を同時に満たすべきものだとなれば、本書の訳者たちは後者の要請について、配慮が欠けていたとはいわないまでも、軽視するきらいがあったのではないかと考えざるを得ないのである〔註5〕。

3. 人類学的な知識の問題

ここでも問題と見られる訳文をあげることから始めよう。最初の例は、第1部第1章からである。

「ダホメにおいては、屋敷地はハースコビッツが<シブ組織>とよんだ男系出自集団の、ほとんどが男たちの住居である。」(25)

「屋敷地は～住居である」という日本語としてこなれない表現はひとまずおくとしても、この表現では屋敷地に居住するのはほとんど男だけで、女も子供もいないに等しいことにな

ってしまう。原文〔註6〕を見てもらえればわかるように、確かにこの部分の英語はそのようにも読める。しかし、「父系（男系）出自集団」においては、通常夫方居住婚が行われること、その結果として居住集団は父系の紐帯を有する男性を中核とし、それに妻と子供をくわえたものになるということは周知の事実である。とすればこの文章も、「ダホメにおいて、〔同じ〕屋敷地に居住する男性のほとんどは、単一の男系出自集団、すなわちハースコピッツの言う〈シブ組織〉の成員である」くらいに訳するのが適当ではないだろうか。もちろん訳者たちも、その点は承知していたのであろう。しかし、上記のような訳文では誤解の余地が残し、一般の読者に対しても不親切のそしりをまぬがれないと思うが、どうであろうか。

次は第2部第2章からである。

「トロブリアンド島民の自給的組織では、家族集団の対称的部分のあいだに相互依存が行われている。あるいはニューギニアのバナロ族の間での複数結婚においてや、西アフリカのティブ族の単純な交換結婚においても同様である。」(84)

この部分の問題点は、これまでとは少々異なる。上記の文章は、日本語としてはほとんど問題がなく、原文にもだいたい忠実である。しかしこの文章を読んで、「家族集団の対称的部分」(symmetrical parts of a family group : 原書61頁。以下の2つも同じ)とか、「複数結婚」(multiple marriages)、「単純な交換結婚」(simple exchange marriages)といった語句の意味がわかる人はどれほどいるであろうか。これらは人類学の術語ではなく、たとえ事典類で調べたいと思っても調べようがないのである。本として出版するからにはそうした点も考慮して、註記するなりわかりやすく説明を加えた形で訳すなりの配慮を望みたいものであるが、それは訳者に多くを望み過ぎることになるのであろうか。

試みに、筆者なりの説明を提示しておこう。まず、最初の「対称的部分」は、原書のほかの表現も加味して考えると〔註7〕、社会が家族のような等質的な単位からなっている場合、その等質性について「対称的」(symmetrical)という語を用いているように思われる。そしてトロブリアンド島では、女が結婚した場合、その兄弟が女の夫に対して、毎年主食であるヤムイモを多量に贈るという慣行がある。上記の訳文の表現は、こうした家族間の交換を意味するものと考えられる。

また、バナロ族の「複数結婚」については、あるいは一夫多妻婚のような慣行を意味するのかもしれないが、弘文堂の『文化人類学事典』(バナロの項)によれば、彼らの集落は単一の親族集団からなる外婚単位で、内部は右と左のふたつの集団に分かたれ、右の集団はほかの集落の右の集団と、左の集団はほかの集落の左の集団と、それぞれ姉妹を交換する形で婚姻関係を結ぶとある。こうした複雑な婚姻の形態を「複数結婚」と呼んだ可能性もありうる。

殊に、「単純な交換結婚」とされるタイプの婚姻が、単に姉妹を交換する形を取ることを考え合わせるなら、その可能性は大きいと言えよう〔註8〕。

さて次は、不適切な訳語の問題に移りたい。たとえば次の文。

「それは、構成メンバーが血のつながった兄弟関係で結ばれ、お互いにいくつかの義務を遂行するうえで助けあい、同様に種々の社会的場面で合流する任意的な集まりである。」

(91)〔註9〕

この文章は、相互扶助の組織に関する記述であるが、兄弟とは本来血のつながっている関係のはずで、それをことさらに「血のつながった」と言い、さらにその兄弟が「任意的な集まり」をなすと言う。この表現では、当該の集団の性格がどのようなものか、つかめないのではないだろうか。

「任意的な、血のつながった兄弟関係で結ばれた集団」とは、どんな集団なのか。原文では〔註9参照〕、「血のつながった兄弟」の原語は‘blood-brotherhood’となっているが、これは実の兄弟のことではなく、「血盟の義兄弟」を意味する。卑俗な例で恐縮であるが、この「血盟の義兄弟」とはやくざが杯を汲み交わして義兄弟の契りを結ぶように、一定の儀礼を行って他人同士が兄弟の契りを結ぶことを言う。つまり、まったくの赤の他人でも、一定の儀礼的行為を経たのちには兄弟同然の絆を持つことが可能になるのであり、そこに加わるかどうかはまさに任意なのである〔註10〕。

上記以外に、問題のある訳語で筆者の目にとまったものとしては、「殺人」、「祈禱師」、「祈禱堂」、「神だな」、「宮殿」などが挙げられる。

訳書55頁の「殺人」は、‘human sacrifice’(原書35頁)の訳語としては意味が広すぎて不適当であり、「人身供犠」くらいに訳すべきだと考える。

次に「祈禱師」(104頁等)の原語は、‘diviner’であるが、これは占い(託宣)を業とする職能者を意味しており、祈りやまじないを主とする祈禱師とは区別されるべきであろう。そもそもこの‘diviner’は、訳書106頁に説明のある「ファ」の託宣にたずさわる職能者を指すと考えられ、単なる占い師というよりも運命の神の司祭をも兼ねるのであるが、その点については次の章で論じたい。

「祈禱堂」も、「一族の屋敷の中の祈禱堂に集まるといった祖先崇拜」(76)という訳文中の表現でも明らかのように、祖先祭祀のための‘cult house’(54)のことであり、訳書のほかの部分で使われていた「儀礼小屋」のほうが適切と思われる。また同じセンテンスに出てくる「神だな」(76)は、‘shrine’(54)の訳として少々くだけすぎであるだけでなく、日本に特殊な宗教的事物の名称でもあり、アフリカの事例に用いるには不適切と考えられる。「社(やしろ)」

くらいが適当なのではないだろうか。

最後に「宮殿」であるが、この語が含まれる訳文「ふたつ一組を好む傾向は、血縁の意味論、宮殿内の組織として日々の予言的命令などの上に刻印を残している。」(79)は、ダホメ文化の理解に関わる問題も絡んでくるので、次の章で論じることにした(註11)。

用語の問題をこまごまと論じてきたが、筆者は何がなんでも人類学で定まった用語法に従うべきだ、それ以外はすべて間違いだなどと主張したいわけではない。これまでも幾度か述べたように、専門外の読者にもできるだけわかりやすくという観点からすれば、曖昧な、あるいは誤解を受けそうな用語は可能なかぎり避け、できるだけ適切な用語を選んで、必要と見たときには訳注を付するくらいの親切さを望みたいという、それだけのことなのである。

4. アフリカに関する予備知識の問題

ここでは、アフリカおよびダホメの具体的な知識に関わる問題を取り上げる。最初は、西アフリカの農作物についてである。第2部第1章から例をひとつ挙げてみよう。

「民間人は、自分自身が使うための1ラフィア袋の胡椒を産するだけの胡椒の木がある割り当て地で、胡椒を栽培することを許されていた」(61)〔註12〕。

この原文は「一般の者は、自分で消費するだけの量しかつくることを許されない」という意味なのだが、訳文ではそれが少々曖昧になっている。しかし、それよりも重要な問題は、'pepper'を「胡椒」と訳していることである。周知のとおり、英語の'pepper'は「胡椒」のほかに「唐辛子」も意味する。この前者が南インド原産の胡椒科の植物であるのに対して、後者は熱帯アメリカ原産の茄子科の植物であり、英語の名称は同じでも実質はまったく別の植物なのである。そして筆者が見聞したかぎり、西アフリカでは唐辛子はごくありふれた香辛料として、地方の市場でもふんだんに見出されるが、胡椒はまったくといっていいほど使用されない。したがって、ここでの'pepper'は「唐辛子」と訳するのが適当と考えられるのである。あるいはダホメでは、なんらかの特殊事情によって、胡椒の栽培が行われていたのかもしれないが、そうだとすればその点を註記する配慮があってもよかったのではないだろうか。

次は、第2部第3章の「屋敷」(コンパウンド)に関する記述である。

「屋敷というものをアフリカ世界の構造の中に置いてみると、私たちはそれが居住形態として西およびスーダン・アフリカの地域における卓越的景観であることを理解しなければならぬ。しかしシブ組織の祖先の家やその精巧な宗教行事の場面と同じように、屋敷がダホメ以上の密度で存在していくところは、おそらくアフリカのどこにもない。

それゆえここでは、三つの特色が融合されている。——」(98)〔註13〕

「～であることを理解しなければならない」までの前半部は文章がやや生硬なきらいはあるものの、わからないということはない。問題はそれ以降の下線をひいた文章である。上記の文のすぐあとには、ダホメの居住集団が (i)空間的に明確な境界を有する集落の形をとる、(ii)単系の出自集団の成員が居住者の中核となる、(iii)その紐帯が祖先崇拜に基づく、という3つの特徴を兼ね備えているという記述がくる。アフリカの集落に、これらの特徴の1つないしは2つを持つケースは多いが、ダホメの場合のようにすべてを備えている例はない、というのがポランニーの主張であり、それを上記の文の後半で述べていると考えられるのである。この主張の当否はさておき、上記の訳文でそうした意図を汲み取ることができるであろうか。そして、最後の段落の接続詞「それゆえ」も何を受けているのかが曖昧になっている。ともあれ訳文を素直に解すれば、屋敷内の家屋の密集度ないしは一定面積における屋敷の数の多さが、アフリカで例を見ない程度に上るということになるであろう。

しかし、アフリカにおいて人口の密集度が最も高いのは東隣のナイジェリア南部、ヨルバやイボの居住域であるというのが通説であり、常識的に考えるなら家屋の密集度もこの地域が最大と見るのが妥当ではないだろうか。また、屋敷の数すなわち集落の規模という点については、隣のヨルバが、数千から数万という大形の都市的集落を持ち、アフリカでも特異な民族とされていることが知られている。つまり、上記の訳文は事実と反するのである。

また、「シブの祖先の家」や「宗教行事」(これらの表現もこなれているとはいえないが)についても、上記の文ではアフリカでほかに例を見ないものと解するか、またはそれらが非常な密度で存在するという意味不明の形で受け取るしかない。

確かにこの個所の原文はかなり省略された訳しにくいものであり、原書に忠実であろうとすれば、日本語も難解にならざるを得ないというところはある。その点では訳者ばかりを責めるのは酷かもしれないが、そこを専門的な知識でおぎなうて平明なわかりやすい文章にしてほしかったと願うのは、ないものねだりであろうか。試みに、以上の点に留意して、説明をおぎないながら下線の部分を訳してみれば、次のようになろう。

「しかしながら、〔幾世代にもわたる〕シブ組織の温床となっていること、〔その祖先に対する〕複雑かつ多彩な宗教慣行と密接に結びついていること、などにかけては、アフリカのどこよりも、ダホメの屋敷が傑出している。

そしてさらに、ダホメの屋敷においてはこうした3つの特徴が、分かちがたく結びついているのである。」

以下、3つの特徴のそれぞれが詳述されていくわけである。

では最後に、ダホメ王国の特徴として日本でも広く知られるようになった、『双分制』の話

に移りたい。これは第2部第1章で扱われている。

まず、軍隊の組織である。

「軍隊は、戦場における場合を除くと市民の指揮下にあった。しかし、ミンガン族とミュー族は、それぞれ右翼と左翼を指揮していて、王国の民間士官の最高位にあった」(57~58)

「市民」の原語は‘civilian’、「民間士官」は‘civil officers’である。‘civil’、‘civilian’は確かに訳しにくい単語で訳者の苦勞も理解できるが、「市民」はアフリカの王国に用いるにはいささか不適當であり、「民間士官」は日本語としていかにもこなれが悪い。これらはいずれも「文官」くらいに訳しておくのが適當ではないだろうか。しかしこの文の問題は、それではなく「ミンガン族」と「ミュー族」という表現にある。

本書の別の個所には「ミンガンすなわちダホメの総理大臣」(78)とあるように、この2つは「族」と呼ばれるような集団ではなく、高位の文官のタイトル名なのである。J.Lombardによれば、Miganは王の次に位置する文官であり、常に王の右に座る。他方のMeuはMinganの次に位するタイトルで、常に王の左に座る。軍の構成においてもこの左右の対比が貫徹され、右翼軍の総指揮官GauはMiganの下に、左翼軍の総指揮官KposuはMeuの下に配置される〔註14〕。つまり上記の文中の「市民」「民間士官」「ミンガン族」と「ミュー族」はすべて同一対象を指しているのである。しかし上記の文章から、そうした組織構成を読み取ることは困難であろう。ほかのところではきちんと「ミンガン」、「ミュー」と訳しておきながら、この個所だけ何故「族」をつけたのか。おそらく単純なケアレス・ミスであろうが、惜しいことである。

次は政治組織に移りたい。

「ダホメの役人は、男女、貴賤を問わずつねにペアになっている。」(76)〔註15〕

上記の訳でも間違いではないのだが、ダホメの政治組織を念頭におけば、「ダホメの官位は、男性と女性、高位と下位という形で常に対をなす」と訳したほうが正確な情報を伝えることになる。ダホメの政治組織がそのような形をとることは、ほかの文献にあたるまでもなく、本書中の次に引用する文章でも明らかである。

「性の双分性に依拠した、このおどろくべき発明は、徹底的に遂行された。王室の行政制度では、すべてが男女一対になって、ときには何対にもなっていってしまった。なによりも王国の各役人は王の屋敷に住む女性の相手か<母>を持っていた。そして、宮殿においても、王は王国中を司る行政機関すべてに完全な組み合わせを持っていた。」(76~77)

〔註16〕

上記の箇所は、ダホメの政治組織の双分的性格を述べる重要な一節であるが、やはり曖昧な表現のために、原書の内容が十分伝えられていないきらいがある。「発明」と訳されている語、‘device’は「仕組み」とか「組織」と訳すほうが適切と思われるし、そのすぐ後の「徹底的に遂行された」という言い方も、「貫徹されている」のほうが日本語として自然と思われるのだが、それはさておき、「女性の相手<母>を」は「女性の相手、すなわち〔公的に任命された〕<母>を持っていた」で、女性の相手と<母>は同じ人間を指す。それ以下の文章も意味が曖昧で、「その結果として王は宮殿の中に、王国全土の行政組織の正確な対応物をもつことになった」と訳すほうがわかりやすいのではないだろうか。そうすれば、王宮の外部には男性の官吏が配置され、内部にはそれをそっくり写し取る形で女性の官吏が配置されるということ、すなわち「外部：男／内部：女」という二元論の存在を、そこに読み取ることができるし、また、外部のマクロコスモスに対して、王宮がマイクロコスモスになっていることも、比較的容易に読み取れると考えるのだが、いかがなものであろうか。

さて、再び軍隊にもどって、そこにも双分制が存在することを述べた文。

「双分組織は軍隊にもまたあまねく存在した。軍隊は、左右両翼に分かれ、それぞれが男女の役割を分担していた。」(77~78)〔註17〕

訳文では、左右の両翼のうち一方が男性の側に、他方が女性の側に分かれるようにも理解できるが、事実はそうでもない。左右のそれぞれがさらに男性と女性に分割されるのであり、ここでももう少し誤解の余地のない文章で表現してほしかったという不満が残るのである。

そして、ダホメ文化における双分観について述べた文。

「両性の均衡は、野戦軍組織から国家機関の最小単位に至るまでのすべてに見られたが、文化の本性的特質に根ざすものでなければ存在できないものだったのである。ふたつ一組を好む傾向は、血縁の意味論、宮殿内の組織としての日々の予言的命令などの上に刻印を残している。二重性の概念の追求は、ダホメ共同体の大宇宙から小宇宙にまで拡がり、王その人でさえそれを妨げることはできなかった。それどころか王権そのものが「双分性」であった。」〔下線引用者〕(79)

この文章は、ダホメ文化における双分観を理解する上できわめて重要な一節と言えるのだが、下線を引いた部分の訳が不適切なために、難解なものになってしまっている。まずは代わりの拙訳を掲げておこう。

「〔こうした〕対称性は、軍隊の構成から、末端にいたる国家組織のすべてに貫通しており、それがまさに〔ダホメの〕文化に深く根ざす根源的な特徴であることを示している。対にたいする偏愛は、親族名称の体系から、神々相互の関係(万神殿。パンテオン)、日々の占

いの方法などに刻印を残している。この徹底した双分観は、マクロコスモスからミクロコスモスとしての共同体にいたる〔ありとあらゆるもの〕におよび、王自身もその例外ではなかった。すなわち、王権それ自体が「二重」なのである。」（下線は上記の訳文に対応させてある）〔註18〕

「血縁の意味論」という訳は原文には忠実なのだが、わかりやすい日本語とはいえないし、「宮殿内の組織としての日々の予言的命令」という表現では、本来別の事柄である「万神殿（宮廷内の組織と訳されている）」と「占い」をひとつにしてしまったために、これも理解が困難になっている。

ここでダホメに関する知識を補足しておくと、ダホメの宗教は多神教であり、至高神を頂点として多数の職能神や自然神が整然とした位階をなす。こうした神々の総体を「パンテオン」(pantheon) または「万神殿」と呼ぶのである。ダホメでは、この万神殿の神々も両性具有ないしは双子として形象化されているものが多く、双分観がそこにも貫徹されていることを見て取ることができる。また、「日々の占いの方法」とは、東隣の民族、ヨルバから伝えられた託宣の体系「ファ」を指すと考えられる〔註19〕。

訳書第2部第3章では、この「ファ」の託宣について説明しているのだが、この訳文もわかりにくい。

「ファとは、宗教行為での家庭薬のようなものである。それは人間を天の神、すなわちふつうの人間にはまったく近づくことのできない一種の運命神に近づけておくことなのである。そこで俗人はファについていくらかの知識を得ることができ、自分自身で天の神を探る。」(106)〔註20〕

ここでもまずは拙訳を掲げておくことにしたい。

『「ファ」は宗教行為における常備薬のようなもので、〔儀礼などを行う際に頻繁に使用される〕。それは各人に自らの『運命』を告げるのであり、この〔ヨーロッパの〕『運命の女神』にも似た神格は、〔ダホメにおいては〕普通の人々にとっても近づきたいものではない。ごく普通の者でも、何がしかの『ファ』の知識を得て、自ら自分の運命を探ることもできるのである。』

訳文の文章では、'Destiny'を「天の神」としたが、これは世界のすべてを知り、人間についても誕生から死までのすべてを見通しているとされる「ファ」のことと考えてよいであろう。したがって、漠然とした「天の神」よりは、「運命」ないしは、「運命の神」のほうが適切と考える。また次のセンテンスの原文は、'is not wholly unapproachable'という部分否定になっており、拙訳のよう解するほうがふさわしいのではないだろうか〔註21〕。

5. 終わりに

本稿では、3つの側面に分けて、K. ポランニー『経済と文明』の翻訳の第1部と第2部を検討してきたわけだが、以上の論述でもその翻訳にはなお多くの課題が残されていることが、理解いただけただけではないだろうか。

『経済と文明』は、経済人類学の分野ですでに古典としての地位を得ており、すでに述べたように専門家のみならず、広い読者間で読まれつつある。そのような状況を見るならば、単に原文に忠実であるというだけではすまされず、よりわかりやすい訳というものを追求する必要があるのではないかと考える。あるいは訳者にとっては、ないものねだりになるのかも知れないが、日本における経済人類学の紹介の先駆者であるお二方には、ぜひそこまでの労を取っていただきたいと、切に願う次第である。

——註——

〔註1〕 参考のために、原文を掲げておく。

The national enemy was, of course, Oyo. This became an established fact in 1708, when, after a twenty-three years' effort, Dahomey succeeded in destroying the Wemenou. (24)

〔註2〕 原文。

No prospect of additional profit through the sale of slaves would induce the King to spare a single victim from the number required. (35)

〔註3〕 原文。

One cannot ignore the possibility that a sociological element was at work, namely, a predominance of female characteristics. We refuse to attempt to appraise the relative weight of the physical and the cultural factors that might have been operative. The fact is that in very few communities of atate level were women called upon to play so large a part in services vital to functioning of the polity. The gifts of the female sex for absorbing detail, retaining information on facts of everyday life in which commonsense is anchored, have been tested and not found wanting. (56)

〔註4〕 原文。

In the absence of statistical data we are reduced to gauging success and failure by the economic historian's customary markers of social welfare or its opposite. Social equilibrium, a stable standard of life or, alternatively, famine, depopulation, and civil commotion are such indicators. (A vital seismograph of monetized economies is the degree

of the stability of the currency.—この部分は訳書で省略されている—) Though only partially monetized, Dahomey's massive foreign trade exposed its exchanges to an unusually strenuous test. But how, without an equilibrating mechanism as represented by the market system, could stable exchanges be maintained in peace and war over more than a century? The rigid structural solidity of the archaic economy must appear at this stage of our analysis as the alternative to equilibrating devices. (95)

〔註5〕訳文の生硬さや不適切な訳語の選択はひとまず置くとしても、本文中で述べたことのほかに、単純なケアレスミスと見られる誤りが多いことも気にかかる。たとえば、「数週間」(for weeks) 続く貢祖大祭が「一週間」(訳書56頁。以下同)になっていたり、「食事」(meal)が「肉類」(83)になったりするし、「社会全体」(the entire society)は「全体主義社会」(85)に姿を変えるとといった具合である。

〔註6〕原文。

In Dahomey, the compound is the residence of most male members of the agnatic descent group that Herskovits terms the "sib." (10)

〔註7〕たとえば原書61頁の後半部分。なお文中のトロブリアド島民に関する記述については、B. マリノフスキー『西太平洋の遠洋航海者』(中央公論社「世界の名著」59所収)1967、同『未開人の性生活』新泉社1971を参照されたい。

〔註8〕ティブ族については、専修大学の室井義雄氏のご教示による。

〔註9〕原文。

It was a voluntary association whose members were bound in blood-brotherhood to help one another in the performance of certain obligations, as well as various social occasions. (66)

〔註10〕こうした義兄弟の関係はアフリカの各地に見られる。たとえば東アフリカの'blood-brotherhood'については、T.O. Beidelman 'The Blood Covenant and the concept of Blood in Ukaguru' Africa 33, 1963というすぐれた論文を書いており、その冒頭で「blood covenant は、blood pact または blood brotherhood とも言う」と述べている。

〔註11〕間違っていないが不適切と思われる訳語も多い。それを一々挙げてはきりがないので、ふたつだけ例を挙げておく。まず、「血縁」と訳されている'kinship'は「親族」が定訳である。次に、「魔術」と訳されている'magic'は、「呪術」とするのが人類学の了解事項となっている。また'ancestral cult'の訳語として、「祖先崇拜の儀礼」という表現が出てくるが、これは単純に「祖先祭祀」でいいのではないかと思う。

〔註12〕原文。

Private persons were permitted to grow pepper on a quota basis, each owner of a field

being allowed the number of pepper plants that would yield one raffia sack of pepper for his own use. (39)

〔註13〕 原文。

To place the compound in the frame of the African world, we must realize that as a pattern of dwelling it is a feature of the land scape in parts of West and Sudanese Africa. But as the ancestral home of a sib and the scene of its elaborate religious practices, perhaps nowhere in Africa is the compound more intensely alive than in Dahomey.

Three features are therefore fused here. (72)

〔註14〕 J. Lombard 'The Kngdom of Dahomey' in D. Forde & P.M. Kaberry (eds) "West African Kingdoms in the Nineteenth Century" Oxford U.P., 1967の81～82頁および86～87頁を参照されたい。

〔註15〕 原文。

Dahomean officials, male and female, high and low are always in pairs. (53)

〔註16〕 原文。

The startling device of relying on the duality of sexes was carried out with thoroughness. In the royal administrative system everything went by pairs and even multiple pairs. First of all, every official in the kingdom had his female counterpart, or "mother," resident in the royal compaund. Within the palace, then, the king had a complete counterpart of the administrative apparatus throughout the kingdom. (54)

〔註17〕 原文。

Dual organization existed also throughout the army. The army was divided into two wings, the right and the left, and within each wing into a male and female part. (55)

〔註18〕 原文。

Symmetry, comprising all organs of the state from the body of the field army down to its least unit, could scarcely exist unless it was due to an ingrained culture unit. The predilection for twos left its stamps on the semantics of kinship, the organization of the pantheon, and the order of everyday soothsaying. This pursuance of a dual notion extending from the cosmos to the microcosmos of the community did not stop even at the person of the monarch. Kingship itself was "twin." (56)

〔註19〕 ダホメの宗教については、阿部年晴『アフリカの創世神話』紀伊国屋書店、1965の第5章に概略がまとめてあり、P. Mercier 'The Fon of Dahomey' in (ed) D. Forde "African World" Oxford U.P., 1954も全体を外観するには好適である。

〔註20〕 原文。

Fa was as good as a home medicine in religious practice. It kept a man in touch with his Destiny : a variant of Fate which is not wholly unapproachable to ordinary man. The layman also can acquire some knowledge of fa and explore his Destiny himself. (78)

[註21] この「ファ」の託宣（ヨルバでは「イファ」と呼ばれる）は、きわめて精緻な体系を有することで知られており、文献の数も多い。筆者も、その概略をまとめておいたので、関心のある方は拙稿「西アフリカのヨルバ族における託宣の体の体系」『専修大学人文科学研究月報』113号、1986を参照されたい。

<編集後記>

本年最初の月報は、御覧のように高麗大学教授 金 浩鎮氏の「第三世界の主要理論と諸観点」の紹介と、ポランニーの「経済と文明」の翻訳上の諸問題を論じられた渡部重行所員の論稿の二本建てになりました。当初は、読書会を続けてこられた渡部、沢野両氏の論稿を予定し、統一テーマを考えていましたが、沢野氏の都合により急遽変更となりました。編集担当者にとっては頭を抱える事態になるところでしたが、幸い望月さんから原稿を頂き、ピンチを凌ぐことができました。今後こんな綱渡りが続きそうな予感が致しております。しかしいざとなるとリリーフが登場してくださるのも、社研の伝統でしょうか。今年の7月には「月報」も300号を数えます。記念号についてのアイデアをお寄せください。 (T.M)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話(044)911-8480(内線33)

専修大学社会科学研究所

(発行者) 三輪 芳郎

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話(03)404-2561
